



明治二十年代の「南進論」を越えて : 矢野龍溪『浮城物語』の国際感覚

表, 世晩

(Citation)

國文論叢, 30:50-62

(Issue Date)

2001-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012947>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012947>



明治二十年代の「南進論」を越えて

——矢野龍溪『浮城物語』の国際感覚——

表 世 晩

1 はじめに

アフリカ大陸に新国家を建設しようと大冒険を繰り広げる矢野龍溪の『浮城物語』は、明治二十三年一月十六日から『郵便報知新聞』に「報知異聞」という題目で連載される。掲載は同年三月十九日、第六十三回まで続くが、その最後の「付言」で「今までの第六十三回を以て仮に一小段落とし五週間計り中休みとなすべし」と記したまま、中断される。「経国美談」に続き、幅広い読者の人気を得ていた『報知異聞』は、未完のままで同年四月十六日『報知浮城物語』（以下『浮城物語』）と題して単行本となるが、その後、内田魯庵などの文学界からの批判や、『出版月評』の復軒居士（大槻文彦）のように作品の思想性を疑問視する批判が相次ぐ。復軒居士が指摘した、国籍を放棄する登場人物や自ら治者になる「問題箇所」などが、その中断理由として何らかの影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

ところが、それ以後『浮城物語』は、柳田泉が評価するように、自由民権運動の終息に伴う民権から国権への転換期に現れた国権

小説として、または、明治二十年代の南進論の流れを汲む作品として評価されるようになる。当然、このような読み自体は不思議ではない。『浮城物語』から国権意識を見出すことは容易でもある。しかし、復軒居士が指摘したように、『浮城物語』には明治二十年代の国権拡張意識やその延長線上に位置する南進論の流れだけでは読み切れない要素が散在している点には注意しなければならない。『出版月評』の復軒居士は『浮城物語』について次のように述べている。

則ち我天皇陛下に忠順なるものにあらず其生国を視ること他国の如く一たび去りて復た眷顧せざる軽薄者なり海上の田横たらんとする逆心を抱けるものなり（中略）如何に架空の小説なればとて如何に結構の雄壮なるを欲すればとて彼が如き不臣者なる横道者なる海上の田横なる捕逃無頼の猜民豪賊なる作良立花を以て先生とし総理とし或は壮快とし或は磊落とし英雄豪傑なるが如く公然憚る所なく之を文字に敷衍縷述するとは実に其妄誕不諱も亦甚しからずや

中国の漢時代、劉邦に反発して、逃れた島で自殺した斉王「田

横」のような反逆者の小説として、復軒居士は作品を読んでいる。作品の中には愛国心など一欠片もなく、登場人物たちはまるで「其生国を視ること他国の如く」見ていると、批判したのである。

今まで、復軒居士の指摘は始と言及されることなく、無視されてきた。しかし、復軒居士の批判が実際の「問題」として認識された痕跡は、昭和十八年八月現代文に改作された、高垣眸の『浮城物語』（以下、『現代語版』）からうかがうことができる。全六十回構成の『現代語版』は、その細かい表現の異同はさておき、復権居士が「妄誕不諱」として批判した「第三十回」や「第三十一回」の、主人公上井清太郎が先住民の「文明天皇」を名乗る部分及びその経験を作良等に語る「第三十八回」の「紀行談」などがすべて削除されている。天皇の神聖化が完全に浸透していた、昭和十八年という厳しい環境の中で、高垣は復軒居士と同じく、天皇の権威を毀損するような「妄誕不諱」の表現を受け容れることができなかったのである。

しかし、これらの問題箇所を『浮城物語』が持っていること自体、そして、このような問題箇所を「架空の小説」の中に組み込んだ、龍溪の文学的発想という問題は依然として残っている。本稿では、明治二十二年の条約改正をめぐる相衝突する政教社の国粹主義的国権意識と、『浮城物語』に内包されている龍溪の世界認識とを峻別しながら、志賀重昂の『南洋時事』から始まる明治二十年代南進論文学との相違を具体化していくこととする。

2 登場人物と「立論の起点」

明治二十二年、大隈重信の条約改正をめぐる議論で、龍溪は

『郵便報知新聞』を通して、『日本人』の志賀重昂・三宅雪嶺や『日本』の陸羯南などの政教社の人々と論戦を広げる。居留地内の治外法権など、欧米列強との不平等修好条約を改正するという当為では両者一致したのだが、帝国憲法や議会開設という新国家体制出発の時、治外法権の代償としての、内地雑居や外国人法官採用問題などを中心に意見が対立していたのである。

重昂や羯南などの条約改正反対派は、このような条約改正は内政干渉であり、新しく出発した独立国家日本の位相を失墜させる行為であると、激しく批判する。特に、重昂は条約改正反対運動や「国粹保存主義」を主唱する過程で、より強固な排外意識の色を帯びるようになる。明治二十年三月刊行した『南洋時事』の「自跋」で重昂は、「南洋トハ何ゾヤ。未ク世人ガ毫モ注意ヲ措カザル箇処ナリ。然レバ予輩ハ南洋ナル二字ヲ初メテ諸君ガ面前ニ拉出シ、是レガ注意ヲ惹起セントスルモノナリ」といい、日本社会の「南洋」への関心を喚起させている。

条約改正をめぐる龍溪と論争を交わす渦中であつた明治二十二年十月、その『南洋時事』は『増補南洋時事』として出版される。増補された『南洋時事』には、条約改正の余波であらう、次のような文章が加わるようになる。

異内地雑居ノ約成リ、全国ヲ挙ゲテ解放セン乎。英人來リ、米人來リ、仏人來リ、魯人來リ、噠嗎人來リ、瑞典人來リ、瑞西人來リテ上等社会と相競争シ西班牙人來リ、葡萄牙人來リ、愛蘭人來リテ中等社会ト競争シ、東印度人來テ其至廉ノ勞力ヲ以テ下等社会ト相競争シ、支那人來テ人力車夫社会ト相競争セバ如何。

重昂はまた、「将来支那下等人民ノ勞役ハ我同胞下等社会ノ職業上ニ幾多ノ影響ヲ波及スルヤ明ケシ」といい、内地雑居によつて発生するかも知れない、経済的、社会的「幾多ノ影響」を語っている。対外的排他意識が欧米列強などの外来勢力浸透への危惧と警戒心により、条約改正反対の過程で具体化していくのであるところが、このような外来勢力に対する危機意識は、『南洋時事』の「克撤以鳴土人の減少」や「丹峨羅亞神靈ノ夢物語」という記事から分かるように、初版出版の当時から見受けられる。つまり、重昂の『南洋時事』は、欧米列強に対する排外意識をその基調としていたのである。

『南洋時事』の南進論に触発された最も早い作品として、小宮天香の『聯島大王』（明治二十・十一―二十一・三）、『改進黨新聞』を挙げることができる。『聯島大王』の前後にも南進論の作品は多くあるが、この作品は『南洋時事』の商業主義的南進思想を大いに引き継いでいる。「冒險企業」という角書からもうかがえるように、「南翠や龍溪の南進論がそれぞれ武力を併用しているのに対し、全く経済力による南進論たる点」で、『南洋時事』の思想的影響は大きいといえる。

重昂は『南洋時事』で、南進論の基本論理である「北守南進」を実現するために、「我日本コレ（中国―引用者注）ト共同連盟シ兼テ英國ト氣脈ヲ通ジ」欧米列強に対抗すべきだと主張する。このような日英中の連携は、『聯島大王』では、大東一郎と清国人吾子黒、または、英国人フォックスや米国の帰化人ネッツ等との関係として屈折して現れる。

しかし、『聯島大王』の一郎と他の外国人との提携は、相互不

信が払拭されていないまま、結ばれたものである。子黒やフォックス、ネッツの事業参加は、彼らの自由意志ではなく半強制的に強いられる。そのために、子黒やフォックスは一郎の専横に反発し、船内で叛乱を起こすのである。

『聯島大王』で行われる事業は「万事軍艦同様不期的の運動」で、「航海の場所を予定して置かぬ事だ。何れの航路より何れの航路へ転ずるとも、すべて船長の命令次第に依り、予め之を他の乗組員に知らさぬ」（第六回（一））ようにしている。そして、すべての事業は船長である一郎によって統制されてしまう。『聯島大王』に登場する外国人や他の登場人物は一郎と従属的關係に位置づけられていくのである。このように、歪んだ形としての連携は、清、英、米のような強大国と日本とを対抗させようとする意識の顕現で、当時としては普通の思考様式であろう。

たとえば、中江兆民は龍溪の『浮城物語』に寄せた「序文」で、「唯一つ残念なりと思ふ処有り。作良立花両雄が英の飛脚船に躍入り船長と談判して阿蘭領事を人質に取らんとする一段は是れなり」と述べながら、

両雄の雄なる且つ日本人なる船長のアングロサキゾンなる乃ち高く自ら矜持して且つ榮譽心と義俠心とを等分に所有せる等より考ふれば極て院劇然として鴻門の会然として読者をして脊髄より冷汗を滴らしむる様做去る可きに他の學術と戦闘とにて持切りたる諸段と反映して一種の美を發せしむる様做去る可きに龍溪先生は何ぞ是に於て一大精采を著けずして爾く淡泊に揮洒されたるや。

と、『日本人』と「アングロサキゾン」との劇的対立を要求して

いる。このような発言の底辺には、作良と旅客船の船長との対立を、日本と「アングロサキソン」という、国家間または、人種間の対立として見なす発想がうかがえる。前掲「出版月評」の復軒居士も、「かの第四十回作良が英国船の船長と応接した一段の如きは文字簡勁稍々喜ぶべしと雖全体に就て概評するときは措辞配句、平淡枯燥の譏を免れず」と、同じく両者対立の面白さが欠如していると指摘する。条約改正を背景とする、日本とイギリスとの関係はむろん、他国との対立構造を「院劇然」と際立たせることは、兆民や復軒居士をはじめ、当時の多くの読者ももっていた一般的な感性であった。

しかし、逆に、龍溪はあえてイギリス人船長との対立を「淡泊に」または、「平淡枯燥」に描いたとも考えられる。職務上、乗客を引き渡すことのできないイギリス人船長と立花との対立を見て、作良は「足下等が乗客を保護するは感するに余りあり」（「第四十一回」といい、結局、阿蘭領事との直談判で領事を人質にとることにする。作良はイギリス人船長の立場を理解した上で、当初の目的を達成するための、最も適切な方法を探しだしたのである。作良はイギリス人船長との正面対決を避けることができたし、船長も職務上の義務を果たすことができた。そして、何よりも民間人に対する浮城丸の武力行使は行われることなく、問題を解決した。作品の他の箇所と比して、「平淡枯燥」になった所以である。

人質になっている笹野を救出するために阿蘭領事まで拉致した作良等は、結局、阿蘭鎮台によって騙されてしまう。憤慨する立花などを宥めながら、作良は「彼輩、本と我々の素性を詳かにせ

ず、一概に目するに海賊強人を以てす。故に我々に対する所又た尋常列国に対するに異なりと見へたり」（「第四十八回」と、阿蘭鎮台の浮城丸に対する認識を冷徹に捉えている。阿蘭鎮台にとつて、作良などは海賊から浮城丸を奪い取った「海賊強人」にすぎないのである。

常に相手の立場に立つことができ、物事を醒めた目で見ると、作良の思考様式やその視線は、そのまま龍溪の特徴であるといえよう。全体情勢を見渡して自らを相対化する龍溪の認識態度は、条約改正をめぐる議論の中でも、作品と同様に現れている。

龍溪は「条約改正問答（続）」（郵便報知新聞、明治二十二年・七・十四）で、「西人の身に取ては斯る諸事不完全に見ゆる国の法律の下に其の身体財産を托するは実に危険至極に思ふべし」といい、諸国の立場から、近代的法制が出来上がったばかりの日本に對して、外国人法官雇い入れ要求や、治外法權撤廃に伴う内地解放要求は必然的なものであると説いている。これに對して十二年間の外国人法官採用や五年間の治外法權認定にも関わらず、即刻内地解放とは国体を毀損する問題と反論した『日本人』は、龍溪を「日本の外国人」（明治二十二年・八・三）と罵倒する。そして、「報知記者は、身正しく日本人にして、其心は外国人なるべしとの批評は（中略）余輩にして若し斯の如き称号を蒙らんには、天上の愧耻として忍能はざるものなり」として、龍溪の相対的觀點を一切拒否する態度をとる。また、反条約改正の先鋒に立っていた『日本』の陸羯南は、明治二十二年七月二十八日の「報知新聞の条約改正論」で、

要するに報知新聞記者と吾輩とは立論の起点に於て既に大差

異あり。吾輩は身を日本臣民たるの位置に置く。彼れ記者は身を外国臣民たるの位地、少なくとも日本と外国との局外に置き、以て今回の新条約を観察するものなり。吾輩は日本臣民たる故に専ら日本の利益を主として、相手の内情如何に拘らず正当の譲与を彼に望まざるを得ず。

と、彼自身と龍溪との「立論の起点」上の差を明確にしている。先に引用したように、復軒居士が『浮城物語』の作良等を評して、「其生国を視ること他国の如く」していると批判したのも、「日本臣民」としての復軒居士が、まるで「外国臣民」のような口吻で演説する作良や龍溪の書き方に激怒したからである。

「国粹保存旨義」の重昂や「日本主義」または「国民主義」を唱導した羯南、そして復軒居士を同一に括することはできないかも知れない。しかし、彼らが龍溪とは違って、「身を外国臣民たるの位地、少なくとも日本と外国との局外に置」いていなかったことは確かである。そして、政教社のメンバーたちや復軒居士が世界や国際社会を見る視線の「起点」が「日本」であることも事実である。このような「日本」起点の視線で安易に国際関係を言説化した時、『聯島大王』の一郎と外国人との関係のように従属的で、屈折した関係として現れてくるのである。

視線の起点を「外国臣民たるの位地、少なくとも日本と外国との局外に置」く龍溪の、『浮城物語』に登場する外国人は必ずといっていいほど、各人の自由意志によって航海に参加する。海賊等に騙され、用役を強いられていた清国人水夫達や葡萄牙人アルベキルク、作品の後半に登場する仏国ルタン新聞の通信者ウィクトル・ミローなど、外国人の冒険参加も各自の志願によっている。

ミローのような人物は、ヨーロッパやアジアが「是亦欠伸を催すの地」(第六十二回)である故に、冒険参加を志願する。今後、いかなる展開を見せるかは分からないが、ミローからは仏蘭西という自国への拘泥は見受けることができない。それは清国人や葡萄牙人のアルベキルクにおいても同じである。

そして、このような「起点」の乖離は結局、『聯島大王』の日本人とは異なる日本人像を築き上げている。『浮城物語』の日本人は旅券を香港から日本へ返送することによって、自らの国籍を放棄し、日本人ではなく、仮想の国「海王国」の国民として活躍するのである。彼らは、復軒居士の言葉を借りれば、日本から「一たび去りて復た眷顧せざる輕薄者」になるが、外国人を含め登場人物たちは、国籍などとは無関係にそれぞれの国から自由でいるのである。

3 南洋と俯瞰的視線

そもそも、「南洋」という概念自体は「日本」中心的な視線である。重昂は『南洋時事』で、「南洋」における「日本」を次のように位置づけている。

我日本ハ東隣ニ殷富ヲ以テ宇内ヲ睥睨スル北米合衆国アリ是レ我ガ緑茶、雜貨ノ販売市場ナリ。北隣ニ魯領浦鹽斯德、黑竜江領アリ、我ガ北海道ノ農産物ヲ消流販売ス可キ将来ノ好市場ナリ。西隣ニ支那アリ、是レ我ガ水産物、食鹽ノ市場ナリ。南隣ニ濠洲新西蘭アリ、我ガ雜貨、絹物ヲ販売ス可キ将来ノ市場ナリ

北のロシア、西の中国、東の米国、そして南の濠洲という方角

づけは、日本を中心に太平洋や近隣の国々を見渡した時の視線である。このような重昂の「南洋」認識はパノラマ的である。このパノラマ的視線とは、視察者が中央に立つて目の前に展開される被写体をその視線の移動に従って描いたり、方向づけたりすることという。

このパノラマ的視線は当然、『聯島大王』とも相通じる。「或る新聞は斯人を論じて実に日本帝国の新商たるに愧ずと言ひ（中略）他日方に東洋南洋各処の島国を聯合して大に商覇を東洋に称するの時もあるも亦未だ知るべからずと言ふに至れり」（第三十二回（三二））と記されているように、『聯島』とは「東洋南洋各処の島国を連合」したものである。「大王」としての日本がその中央に位置しているし、その代表的存在として大東一郎がいる。このような発想の下で、大東一郎を中心とするストーリーは展開するわけだが、すでに指摘したとおり、すべての活動はこの一郎によって牛耳られている。一郎と他の登場人物との関係は主従関係へ転落してしまい、一郎以外の人物間のコミュニケーションは遮断されてしまう。そのために、上海の「憐れむべき窮民」を率いて「南洋無人の地開拓」に向かった、世良匡の話は長文の手紙（第二十八回（三十四））の形をとらざるを得なくなる。作品の中で、最も人道的な人物である世良匡の活動は報告で終わり、彼の活動が持つ意味は作品の中で死蔵してしまふのである。

それに対して、『浮城物語』はその「緒言」に記されているように、「常人」上井清一郎の「経歴史」である。そして、龍溪が「浮城物語立案の始末」（『郵便報知新聞』、明治二十三・六・十七（七・一））で述べているように、「浮城物語は豪宕拓落を以て全

体の骨子とし、一個常情の人を主人公として偉人奇士の神采態度をチラ々々と隠見せしめ、此の常情の人と相ひ反照せしめんと企てた」作品なのである。上井によって作良や立花の話や物語全体は語られているわけだが、それは既成の英雄中心の物語と弁別させるための意識的な設定でもある。その意識的設定の例としては、『現代語版』では削除され、『出版月評』の復軒居士からは、

第二十六回より第三十四五回に至る一段は即ち作者用意のある所ならん然れども余は読みて此一段に至り其無雑繁冗にして稍々倦厭すべきを覚ゆ（中略）此全局の雄壮なる小説を俗殺し了る惜むらくは作者彼の一段に於て上井菊川の如き人物を棄てて別に他の気概あるものを捻り出し以て慷慨悲壯のの語柄を引き起さ、りしを

と批判された、上井や菊川を中心とする部分を挙げることができ。『聯島大王』は、大東一郎が直接に関わった世界や空間しか描けないのに対して、『浮城物語』は、作良や立花のような英雄だけではなく、彼らとは離れている登場人物にも細かく目配りしながら、各々の人物を同時に描き、それぞれの登場人物に与えられた空間を多面的に表現している。

余は初め騎馬にて号令し居たりしが敵兵に狙撃せられ僅か四五間を隔る草樹にブツツ、カチツ、と音して銃丸達着し又た十間内外を隔つる島の中にも時々パツ、パツと砂煙を打揚げたり、甚だ危険なるを以て馬を下り徒歩して指揮したり。我が臼砲と胸壁とは其の利益最も大なりと見へ、敵兵次第に繰引きに左翼を引揚るか如く見へたり

然処、何ぞ図らん敵か我が左翼より引き退きしと見へたるは

其の全力を我か右翼に集め山腹を経て之れを猛撃するの軍略ならんとは。見る／＼敵の戦線は次第に我か右翼を迂廻し来り今二三十分を経は斜に右翼の背後に押し廻はらんとす
〔第五十六回接戦〕

これは龍溪が得意とする戦闘場面描写の卑近な例である。ここからもうかがえるように、上井の身近な「砂煙」から、鳥瞰的視線によらざるを得ない「敵の戦線」に至るまで、龍溪の視線は自在に移動している。一定に固定された視線による、逐次の場面展開の叙述ではなく、多角的視線で戦場の空間を細かく捕捉している。語り手の視線が全体から局所へ、またはその逆の順へと、自由自在に動くことによって、戦闘場面は一層の臨場感を醸し出し、作品のリアリティを強化させている。

また、彼ら浮城丸の乗組員が自由に活躍できたのは、「我々將さに天下を横行せんとす、日本政府の旅券を所持せば恐くは累ひを父母の国に及ぼさん」(第三回)と語ったように、国籍を放棄することができたからである。この部分によって、「如何に架空の小説なればとて」と、復軒居士の怒りを買ったようにしたが、それは逆に、まさに「架空の小説」であるが故に国籍を放棄することができたともいえる。

龍溪にとって小説は現実の中では「遭ヒ易カラサルノ別天地ヲ作為シ卷ヲ開クノ人ヲシテ苦樂ノ夢境ニ遊ハシムルモノ」(『経国美談』の「自序」)である。「別天地」を描くためには、「累ひを父母の国に及ぼす」国籍を放棄する必要がある。海賊同然、何一つ拘泥するものもなく、ほしいままに活動することは現実の中ではあり得ないからである。国籍放棄こそ、作品内世界のリアリテ

ィを保ちながら、自由に活動するための必要条件なのである。つまり、「浮城物語」の作良等は、無国籍の架空性によって、「累ひ」を国家に及ぼすことなく自由に活動できたし、言い方を換えれば、作中の現実の国家から逸脱することができたのである。そして、龍溪自身も創作過程で現実の国家から自由でいられる、仮想の視線を確保することができたのである。

このような架空の視線は、『浮城物語』の中で多く用いられる地図や様々な俯瞰図の挿絵にも通底する。龍溪は幼少の時期から世界地図に親しんでいたという。⁽⁵⁾『浮城物語』だけではなく、『経国美談』の中でも用いられた、これらの地図や俯瞰図自体は、直接肉眼で見ることができない世界ではない。丸い地球を平面上に描いた地図や上空から見下す視線で描かれる俯瞰図は観念によって構築された虚構の世界なのである。

「第七回新版図」で浮城丸の乗組員に提示される世界地図は、日本が右上の方に描かれていて、今後の進出経路が点線で示されている。その地図には、日本や架空の島である海王島、マダガスカル、そして中央アフリカが黒塗りで表示されている。この時、読者の視線は日本から出発し、その点線を追って中央アフリカに至る。そして、広闊な中央アフリカに視線が止まると、そこには浮城丸の人々が今後活躍する、広大な世界が広がっているのである。この地図によって浮城丸の人々とともに、読者も無限の可能性をもつ未知の世界へ導かれていくのである。

世界地図や浮城丸の俯瞰図などの挿絵が示しているように、俯瞰的視線は観念的とはいえ、世界と日本との関係を総合的に明示し、作品理解に役立つものである。特に、浮城丸と阿蘭船隊との

海上戦を示す「第四十五回」及び「第四十六回」の海戦図は、両側の動線を具象化することで戦闘の展開様相を鮮明に現す。依田学海は「第四十五回」について、「往復廻環。旋転自在。文章亦見三陣法。爆彈破裂。雷電並発。文氣激昂。筆端生風」と評している。周密に書かれた戦闘場面の記述は、浮城丸や阿蘭船隊の総体的動きを連想させる海戦図によって、「筆端生風」ような迫真のリアリテイを読者に感じさせるのである。

このように、俯瞰的画像は読者の想像力を積極的に誘導する。「第十九回」には浮城丸の船舶構造を説明するため、俯瞰的挿絵が設けられている。高垣眸は「現代語版」の「序」で、

僕が始めて、単行本の「浮城物語」を読んだのは、小学校（国民学校）四年生十一歳の時のことで、今から三十五年ばかりの昔だ。相当、難解なところもあつたが、読み始めると面白くて面白くて、忽ちに熱烈な「浮城物語」の愛読者になり、画用紙などへ、盛に「浮城物語」の挿絵を真似、艦型図を描いたり、或は、もつと多くの巨砲を載せて大戦艦の艦型図を想像で描き上げたり、空想で設計したり（恐らく、後代の巨砲巨艦主義ドレッドノート級戦艦の先駆的設計図であつたかも知れない、呵々）して楽しんだものである。

と述べながら、「浮城物語」に用意された浮城丸の挿絵に導かれる、想像の世界を語っている。多分、高垣少年は、例の世界地図を少しずつ黒塗りして、地図全体を黒く塗っていたのであろう。このように俯瞰的視線は、パノラマの平面描写とは違って、読者の想像力を積極的に介入させる。そして、俯瞰図などによって生じた余剰空間は「浮城物語」の面白さを倍増させているのである。

ところが、このような空間設定は作品説明の補助や読者の想像力だけを誘発するのではない。「第七回新版図」の世界地図が浮城丸の乗組員に提示される前に、作良や立花は次のようなことを語っている。

既にして又た曰く「今余が請ふ所の天下とは此の地球を指す。敢て日本を言ふにあらず。日本は天下の一部分のみ」と。余、心中独言して曰く「好丈夫」（第三回）

某し熟考ふるに我々已て此の地球に生れ来りし以上は亦た此の地球を横行するの自由あるへし。豈に其の日本に生れたるの故を以て其動きを日本のみに限るへきの理あらんや、視我々の眼前に横はる海洋は是れ天の我々をして地球を横行せしむるの道路なり。五大洲中何の処か天の我々に蹂躪を許さざるの地あらん、我々已に此の地球に生れ来り。応さに此の地球を以て一舞台とし稀世の大業を成すへきのみ何そ必らずしも日本のみに踰踏たらん（第六回）

提示された「新版図」の世界地図は、「稀世の大業を成すへき」一舞台であるが、その反面、日本が「天下の一部」であることを表象する。国籍放棄の行為と同じく、席卷した「無人の地」を天皇に献上すること、そして、事実上、天皇への献上が不可能な世界情勢についての現実的な認識を確実にふまえながら、作良や立花は日本という「国」を相対化しているのである。

むろん、龍溪が描く浮城丸の人々が日本自体を完全に否定しているわけではない。しかし、日本が「天下の一部」とあるとし、世界を総体的に認識することは重要である。世界を一縮図として見渡すということは、自らが所属している現在から離れて行き、

その現在を客観化するという意味につながる。重昂や天香をはじめとする南進論の文学が「日本に生れたるの故」に、自らを国家に拘束させているのに比べて、龍溪の世界認識は現在の国家とは異なる、新国家の建設も可能な開放的な世界認識なのである。

4 新国家と国際社会

龍溪は「浮城物語立案の始末」で「不善ならぬ娯楽」こそ小説の本質であると説いている。その「娯楽」には、熾烈な戦闘の中生死が問われる戦場にいるにもかかわらず、「小銃を捨て軍器を擲（な）ども一擔の草葉樹木だけは確と之を背上に荷て走」（第五十六回）る「仙風道骨」の地質植物専務松本棟一や氣球から落ちて原住民女性から結婚を迫られる上井の滑稽さが含まれる。また、すでに言及した海上戦や様々な戦闘の攻防戦自体も「娯楽」の範疇内に入るのである。そして、『現代語版』に序文を寄せた内閣情報局情報官で海軍中佐の古橋才次郎が、「此の物語が単なる空想の産物でないのは、物語の主要な舞台になっている東印度諸島に関する叙述が、極めて精緻であり、今日より見るも殆ど何等の誤謬も発見されない」と驚嘆したように、未知の世界を分かつていく「娯楽」もあったはずである。つまり、緻密な地域情報や先端科学武器という知識に裏付けられて展開する、未知の世界への冒険、それ自体が読者の想像力を刺激したといえよう。

ところが、『浮城物語』が単純な冒険小説や戦争小説にならなかったのは、「娯楽」の前に付された「不善ならぬ」という修飾語による。「不善ならぬ」という回りくどい言い方は極めて曖昧な表現であるが、この曖昧さ故に、その中には多くの意味合いを

含蓄することができる。そして、作品享受の方法によっては、様々な解釈を可能にしたのである。必ず「善」を力行する必要はないけれども、「不善」だけは犯さないことが、その「娯楽」という範疇の境界線を区画しているのである。

『浮城物語』には様々な戦争場面がある。主人公上井は、「第五十二回」で横軽太へ侵入してくる阿蘭兵隊の汽車を地雷で爆発させる。そこには、「十五輛の列車は一片の影をも留めず、遙か二三町を隔てて碎片処々に散落し、手とも言はず足とも言はず血塗れの人体四辺に散飛し」た光景が広がっていて、「一見戦慄せしむ。嗚呼我れながら残酷の計を為したりと空恐ろしく」と、上井自身に感じさせている。このように、龍溪は戦争の怖ろしさや自己反省の契機を作品の随所にもうけている。『浮城物語』が扇動的戦争冒険小説にならないように、龍溪は注意深く配慮していたのである。

浮城丸の人々は、「無主の地を略し、微弱にして自立する能はざる邦国を征服するも何の不可あらん」（第六回）といい、「万国公法は論なり法にあらざる」という、明治二十年代現在の現実的イシューを持っている。実際に、作品の中でも「両王室とか云へるものは腐朽せる老木に同じ。此国の土人等何事をかなし得べき、此勝を致せしものは全く両君の力なり」（第六十三回）という、ミローの発言のように「微弱にして自立する能はざる」横軽太や空軽太を略取する機会があった。これは欧米帝国主義の、アジア侵奪に通底する論理であるが、作良は

余等をして天上より降りし者ならしめば或は是等の事を為さん。余等已に王室を助くるを以て名となし事を挙げ終りに臨

んで却て之を奪ふ。仮令幾多の富貴光耀を得るも清潔義俠を以て称せらるる日本人種の榮名を穢かすを奈何せん

といい、ミローや立花の要求を拒否する。そして、「偷安苟且是れ東洋列國の通弊なり。亡滅を致すもの皆な之に因らざるはなし」と嘆き、その「亡滅」の可能性を認めながらも、「日本人種の榮名」を守り通すのである。

このように、『浮城物語』には、「腐朽」を理由に侵略を恣行する西欧列強の帝國主義的イデオロギーに対する反措定としての自己節制が働いている。このような自己節制や自己反省が虚妄の冒險小説やプロパガンダ的戦争侵略小説と『浮城物語』とを弁別させているのである。

龍溪にとって植民地は憧憬の世界である。なぜなら、新たな植民地は「旧来ヨリノ仕来リモ薄ラキ随テ尊卑高下ノ人情モ少キカ故ニ道理ノミヲ以テ之ヲ政府ノ土台ト為スコト甚タ容易ナル」(『訳書説法』、明治十六・十二)からである。実際、『浮城物語』は、「無人の地を席捲」するための冒險である。この無人の地で建設する新しい国家は、「旧来ヨリノ仕来リ」への拘泥がない社会であるために、上井は阿蘭鎮台の尋問に対して「共和政國と遣付けよ」(第二十四回)と、大胆で勝手な発想ができたのである。また、龍溪は明治十五年十一月の「人權新説駁論」でも「人類社会相ヒ互ノ交際ニ生ズル義理權利ノ類ノ如キ」「道理」による植民地として、濠洲やカナダなどを挙げている。

濠太利ニ於ケル英國ノ藩属地タスマニア及ビビクトリア、新南ウウレス、サウス濠太利ノ人民ハ、今日皆ナ充分ナル自由自治ノ權利ヲ保有セリ。即チ第一二ハ是等屬地ノ人民ハ皆其

地ノ法律ヲ自ラ制定スルノ權利アリ。第二ニハ其政体ハ本國ニ異ナラズシテ、上院アリ下院アリ、其議員ハ人民ヨリ公撰ス、且ツ藩屬地一切ノ事務ハ決シテ本國ヨリ関涉ヲ被ムル事ナシ(中略)此權利ハ独リ濠太利ノ屬地ノミニ限ラズ美洲ニ於ケルカナダ及ビアフリカ加ニ於ケル喜望峰其他ノ屬地ニシテ以上ノ權利ヲ有セザルモノ稀ナリ

そして、これらの植民地が「政治上ニ於ル自由モ却テ本國ニ勝レル」場合もあるとしている。龍溪にとって、植民地は「旧来ヨリノ仕来リ」に束縛されることのない、「自由自治平等均一」のような「道理」によって制御される社会なのである。『浮城物語』において、「若し不幸にして日本の国力之を所有するに勝へずんば、我々諸君と與に自ら其地に王たらん」(第六回)と宣言したとき、その背後には、このように「本國ヨリ関涉ヲ被ムル事」のない新国家体制の理想があったのである。

この「人權新説駁論」は、「凡ソ吾人ノ權利ハ蓋シ專制ノ大權ヲ掌握セル治者即最大優者ノ保護ニ由テ邦國ノ成立ト共ニ始テ生ジタルモノ」という優勝劣敗の進化論をもって天賦人權論を否定した、加藤弘之の『人權新説』(明治十五・十)を論駁した論文である。自然法則としての優勝劣敗の論理が人間社会、さらには国家間の関係に適用されたとき、「腐朽せる」空軽太や横軽太を「優者ノ保護」という名目で侵略する口実になる。つまり、作良等は自らが「天上より降りし者」ではなかったため、空軽太や横軽太の權利を与奪することはできなかったし、屬地にすることでもできなかったのである。

加藤弘之が依拠した優勝劣敗の進化論は明治年間の思想界に根

強く引き継がれていく。南進論の先駆である重昂の『南洋時事』なども、周知の通りこの優勝劣敗の論理に基づいている。そして、例の「国粹保存主義」に至るのである。重昂は「日本人」が懷抱する処」（明治二・四・一八、『日本人』）で、「国粹」を次のように説明している。

蓋し這般の所謂国粹なる者は、日本国土に存在する万般なる
囲外物の感化と、科学的反応とに適應順從し、以て胚胎し生
産し成長し發達したるものにして、且つや大和民族の間に千
古万古より遺伝し来り化醇し来り、終に当代に至るまで保存
しけるものにしあれば、是れが發育成長を愈よ促致奨励し、

以て大和民族が現在未來の間に進化改良するの標準となし基
本となすは、正しく是れ生物学の大原則に順適するものなり
重昂は「生物学の大原則」と日本国土の「囲外物」から「国粹
保存主義」を見出している。日本の「囲外物」や「生物学の大原
則」という客観的合理性は、重昂自身「予輩は徹頭徹尾日本固有
の旧分子を保存し旧原素を維持せんと欲する者に非ず」と否定し
たように、固陋な伝統主義とは異なる。かえつて、「生物学の大
原則」の合理性や日本の「囲外物」の特性は、伝統主義的非合理
性や模倣的欧化主義に対する批判的地平として有効なのである。

しかし、現実の中で、「囲外物」による日本的「国粹」の論理
が不可逆的決定論として歪曲された時、日本国土以外の人間が入
る余地のない先驗的絶対性を持つていくのである。このように、
特化された「絶対性」が「南進」の進出論理と結合すると、帝国
主義的侵略論理として変質してしまうのである。

例えば、同じく南進論の流れを汲む、末広鉄腸の『南洋の大波

乱』（明治二十四・六）に見られる露骨的な侵略イデオロギーが
それである。西班牙の植民地である緋笠濱の独立を成し遂げた多
加山は、

西班牙政府の手より取戻せしものの、歐洲の戦争が平和に就
く上は同国より許多の海陸軍を差向けて再び戦争となるに相
違なし、三百年も外国の支配を受けし人民を以て西班牙に抵
抗することは容易ならず、日本の国力近來旭日の昇る勢ひあ
り、今度西班牙の兵隊と戦ふて勝利を得しも、全くは日本人
の助に出て、我々の祖先も日本人なれば、緋笠濱全島を挙げ
て日本の附庸と爲し、其の保護を受くるに如かず

として、緋笠濱群島を日本に付属させる。ここで多加山は、『浮
城物語』のミローが「此国の土人等何事をかなし得へき」と語つ
たように、三百年間外国の支配を受けたから民衆の自発的抵抗は
あり得ないとしている。そして、多加山自身が「高山右近」の子
孫であるという理由で、「日本の附庸」を当然視している。重昂
が唱えた「囲外物」の特殊性は『南洋の大波乱』では排他的血統
主義として転化された。そして、その排他的血統主義の絶対性は
如何なる批判的問題意識もなく、優勝劣敗の力の論理によつて緋
笠濱群島の日本帰属という結果をもたらしたのである。

既に指摘した通り、重昂の『南洋時事』や天香の『聯島大王』
はもちろん、『浮城物語』刊行以後の作品である、鉄腸の『南洋
の大波乱』も明治二十年代の日本という、現実の「国家」を常に
背負っている。それに対して、『浮城物語』は現実の国家体制か
ら離れている。遠い古代ギリシアの共和制都市国家を描いた『経
国美談』や古い日本社会とは異なる、社会主義的国家の『新社

会』がそうであるように、龍溪の文学は現実の日本の反指定として、新しい国家体制を描く。それは単に現実の日本を否定するというよりは、現実の日本を踏まえた上で、最も実行可能で新しい社会ビジョンの提示なのである。

龍溪の『浮城物語』と重昂からはじまる南進論文学とのもつとも大きな差は、彼らの視線が位置している地平に起因する。重昂が日本という「国家」をその地平としているのに対して、龍溪の視線は世界全体を見下ろす上空に位置している。厳密にいうと、その視線は上空の一点に固定するのではなく、自由自在に移動する流動的視線で、重層的に散在する視線なのである。固定した単一視点からの視線では視察者の視線に見えるものしか見えないし、それしか書けない。そして、常にその所与された空間と関連せざるを得なくなり、その空間だけを通して世界を見るのである。つまり、関連づけられた空間から自由でいる時こそ、同じ世界でも複眼的視線で見ることができるとし、一視線では見えない世界を描くことができるのである。

重昂のような空間認識では、日本の南にある海洋は「南洋」という局所にすぎない。それに対して、地図を見下ろすような視線で把捉される「南洋」は全域的な空間の一部としての海洋そのものである。「見下ろす」視線において東西南北の方向は無意味なのであり、その政治的イデオロギー性は褪色する。どの視点から視線を合わせるかによって東西南北は決定されるわけであるが、常に移動する視線において東西南北はそれほど決定的意味をもたないのである。復軒居士の怒りが示す「妄誕不諱」の文学としての可能性や、大東亜戦争中「不朽の生命を保つて、我等の胸に迫

るのも故無しとしない」（古橋才次郎の「序」）南進論の先駆的作品としての読みは、つまり、『浮城物語』がもつ重層的空間に起因したものである。もちろん、このような評価が読み手に与えられた空間と読み手自身との関係に関わっていることはいうまでもなからう。

5 おわりに

龍溪と、重昂、羯南らの政教社とは、その西欧や世界認識においては全く異なる地平に立っている。そのために、両者は条約改正をめぐる激しく衝突するのである。ただ、龍溪にとっても、帝国主義的侵略をほしきままにする西欧列強の脅威は警戒の対象であり、当然ながら、彼にとって日本という国は現実の中では愛すべき「父母の国」である。しかし、『浮城物語』を前後とした日本社会は、対外的には排他意識が高ぶる一方、国内的には国粹を中心として社会全体の硬直化が進んでいく。それが明治二十二年の森有礼暗殺や条約改正反対運動、それに触発された玄洋社の来島恒喜による大隈重信テロ事件などとして現れる。世界中で蔓延する西欧列強の植民地略奪競争がエスカレートする中、保守化していく日本の現状があり、その中で国威宣揚と反帝国主義というジレンマは龍溪を悩ませたのである。

龍溪は「浮城物語立案の始末」で、「不善ならぬ娯楽」という「正産物」以外に、その「副産物」として、

日本の盛衰存亡は常に海外より来るを知らしめ、遠航貿易の努めざる可からざるを知らしめ、海外の風土、人情、物産を知らしめ、現世紀の兵器は理科学の所産なるを知らしめ、理

科学の貴むべきを知らしめ偉人傑士の風采を想望せしむることを挙げている。これら理科学への理解や外国事情そのものを分けることが結局、「娯楽」に帰結するのはいうまでもない。とりわけ、「日本の盛衰存亡は常に海外より来るを知らしめ」ることも、龍溪が『浮城物語』を書いた、重要な理由なのである。⁷⁾

明治二十二年・三年は帝国憲法の発布や実施、帝国議会の開設という、新しい国家体制出発の年である。龍溪は日本と国際社会との関係、そして、その国際社会の中で、在るべき日本の有様を提示すると同時に、日本が指向すべき国家の姿を方向付けようとした。「万国公法は論なり法にあらざる」世界を一方に、国全体の保守化傾向に対する反措定として、積極的に世界と取り組んでいく姿を『浮城物語』は提示している。

この時、「不善ならぬ」という、最小限の条件が最も現実的で、実践可能な説得力を持つと、龍溪は考えた。『浮城物語』は海洋冒険の物語ではあるが、必ずしも海洋冒険だけを語っているわけではない。「南進論」的優勝劣敗の世界観の反措定として、明治二十三年という、当時の社会に向けた発言なのである。

注

- (1) 内田魯庵「浮城物語を読む」(『国民新聞』、明治二十三年・五・八、十六、二十三)、「龍溪居士に質す」(『国民新聞』、明治二十三年・七・十五、十六)及び復軒居士「浮城物語」(『出版月評』、明治二十三年・五・三〇、三十一号)
- (2) 柳田泉「矢野龍溪の『浮城物語』について」(『政治小説研究』下、昭和四十三・十二)

- (3) 柳田泉「『浮城物語』について」(『浮城物語』、昭和十五・十一、岩波文庫)

- (4) 『浮城物語』が「報知新聞」として「郵便報知新聞」に連載されている時、「第七回新版図」の世界地図、「第十九回議決」の浮城丸の俯瞰図、「第四十五回雪白艦、大に蛇波洋に戦ふ」及び「第四十六回酣戦」の海戦図、「第五十六回」の「東印度諸島と日本との位地大小等を示す」地図、「第五十七回鎮台、三路に大兵を出す」の東南アジア一帯の拡大地図など、三枚の地図と三枚の俯瞰図が掲載されていた。しかし、単行本刊行の時「第五十六回」、「第五十七回」の地図は省略される。

- (5) 『龍溪矢野文雄君傳』(昭和五・四、春陽堂)には、「十歳の頃、父の膝下と呼ばれて、当時新版の世界地図を示され「自分どもの幼なかつたとき、余の中の事といへばこの地図に見える渺たる日本の範圍に止まつていた。然るに、今や世界の交通が開けて、活動の舞台は全地球に拡大したのである。汝等は実に世界の人になつたのである。(中略)汝等は宜しく志を世界におかなくてはならぬ」と、しみじみ説き聞かされたこともあつた。」という、矢野龍溪と父光儀との逸話が記されている。

- (6) 加藤弘之がイギリスの印度植民地政策をもって優者による権利付与の例証としているのに対して、印度は「威力」による植民地で、他の植民地とは異なるとしながら、「印度人民ハ常ニ其回復ヲ謀ルモ威力足ラザルヲ以テ冤ヲ吞ミ恨ミヲ含ミテ英國ニ從属スルノミ」と、その「不道理」による優勝劣敗論理を批判する。

- (7) 拙稿「『浮城物語』の国家意識―西南戦争と上井清太郎の「常情」を中心に」(『国文論叢』第二十九号、平成十二・三) 参照。

(びよせま／本学大学院博士課程)